



Title	国際収支理論研究
Author(s)	佐野, 進策
Citation	大阪大学, 1983, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27756
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【2】

氏 名・(本籍)	佐 野 進 策
学 位 の 種 類	経 済 学 博 士
学 位 記 番 号	第 5 9 3 0 号
学位授与の日付	昭 和 58 年 3 月 3 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	国際収支理論研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 渡 辺 太 郎
	(副査) 教 授 建 元 正 弘 助 教 授 原 正 行

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、国際収支（総合収支）均衡・不均衡判定のための定義、国際収支のいくつかの定式と分析方法、国際収支の調整機構と調整策、国際収支不均衡＝対外準備変化＝貨幣供給変化を1つの重要な径路とするインフレーションと景気変動の国際的波及とそれの遮断対策、さらには対内均衡と対外均衡の同時達成のためのポリシー・ミックス論など、国際収支固有の問題ならびに国際収支に関連した諸問題を理論的に解明し分析することを意図している。

第1章では、理論分析のためにも実践的にも利用可能な総合収支判定の基準を、とくにIMF（国際通貨基金）とOECD（経済協力開発機構）の最近の資料に即して検討し、それがいわゆる自律的対外取引からの総受払差額という純理論的観点からの判定を現実面からより具体化させ充実させることを明らかにした。また、いわゆる「国際収支の国際的斉合性」の妥当性についても詳しく検討した。

第2章では、国際収支把握に関する定式化とそれら相互の統一的な関係の把握を試みた。さらに分析方法としてのフローとストック、均衡分析と不均衡分析に言及しつつ、各アプローチを包摂するところの国際収支分析のための一般均衡体系を設定した。

第3章では、前章で設定した体系をより具体化したモデルに依拠して為替相場調整の国際収支効果を、(1)弾力性アプローチ、(2)弾力性分析と乗数分析の結合、(3)アブソープション・アプローチ、(4)ツィアンの総合化と貨幣の役割、(5)マネタリー・アプローチとの関連で厳密に分析し、それらの特徴と問題点を指摘した。さらに、(3)とそれの高められたものとしての(5)が国際収支を対外取引面から把握し定式化する伝統的・正統的な(1)(2)(4)と相対立するものではなく、むしろ分析方法上相互補完の関係にあり、両者あいまってより充実した国際収支の理論分析が可能となることを結論づけた。

第4章では、変動相場制度の国際収支自動調整機能とくにいわゆる「Jカーブ効果」について、分析モデルを設定して検討した。本論で「Jカーブ効果」の原因として、(1)為替相場変動がもたらす輸出財の生産コストへの影響ならびに輸出企業の特定の価格政策、(2)為替相場変動に対する貿易業者の貿易量調整のタイム・ラグ、および(3)変動相場制における貿易業者の相場予想が現実の貿易量に与える一時的な影響、の3点を挙げた。後半では資本移動を導入し先物為替市場をも考慮した一般均衡モデルを用いて、管理フロート制の国際収支調整機能をとくに調整期間との関係で分析した。

第5章では、各為替相場制度の下での金融・財政・為替政策の経済的諸効果を、資本移動の程度や外貨不胎化策の程度など背後のさまざまな状況との関連で、詳しく分類学的に分析した。そしていわゆる「マンデル＝フレミング命題」の導出と吟味を行なうとともに、相場予想の役割を重視して「命題」を検討したドーンブッシュ・モデルをより一般化した体系によって政策の効果分析を行ないかつ「命題」を位置づけた。

第6章では、インフレーションと景気変動の国際的波及の問題を資源制約をも考慮しながら分析した。とくに、国際収支不均衡から生ずる国内貨幣供給の変化という重要な径路をはじめとする種々の波及径路（波及メカニズム）を明示しながら、海外での全般的インフレ、オイルショック、海外不況などの国内経済への影響とそれからの隔離対策を分析・検討した。例えば、海外での全般的インフレの場合、その遮断対策として相場の完全な伸縮化は完全に効果的であるが、外貨不胎化策の有効性は不完全であること、オイルショックの場合には、相場伸縮化は何ら有効ではなく、国内にスタグフレーションと為替相場下落をもたらすのみであること等々を分析した。

第7章では、対内均衡と対外均衡の同時達成のポリシー・ミックスを論じた。2目標2手段のケースにおいては為替相場の小刻み調整が手段となる場合には代替的割当も安定的となりうること、また3目標3手段の場合、「有効市場区分の原理」が適用できないとしても、貿易理論の「マッケンジー＝ジョーンズの定理」を適用した割当と、「政策の失敗」の下での「ブロック割当ルール」による割当とは同一でかつ最も効果的な割当であることを示した。また、厚生最大化アプローチの観点から、インフレと失業のトレード・オフ関係の下での最適政策を図形的に分析した。

最後の章では、経済政策の国際的調整をとり挙げたが、広範な問題の性質上、本論では各国が同時に国内均衡を達成するための総需要政策の国際調整の型の提示とその効率性比較を例示的に言及するにとどめた。

論文の審査結果の要旨

筆者は国際収支理論の戦後の発展方向をよく見定めて、先行モデルよりもさらに一般化した理論モデルを構築し、精緻な理論展開をはかって、先行理論を筆者の体系のなかに位置づけるとともに、いくつかの新しい知見をわれわれにもたらした。経済学博士の学位に十分値する労作であると判定する。